

《薬局サーベイランスコメント》

『第5週（1月30日～2月5日）の推定受診患者数は約1,442,000人と前週の値をわずかに上回ったが、第6週（2月6日～12日）は減少することが予想され、流行のピークは過ぎ去りつつある』

2017年2月7日

済生会中津病院感染管理室

安井 良則

薬局サーベイランスによる今シーズン（2016/2017年シーズン）の2017年第5週（1月30日～2月5日）の全国のインフルエンザ推定受診患者数は、前週（第4週）の推定値（1,439,807）よりもわずかに増加して1,442,043となり、3週連続して100万人を上回るとともに、2008年に本サーベイランスが始まって以来の最高値をさらに更新しました（図1）。一方、休日明けの月曜日（2月6日）の推定受診者数は288,571と前週の月曜日（1月30日）の値（370,432）よりも大幅に減少していて、第6週（2月6日～12日）の患者数は第5週よりも減少するものと予想されます（図2）。

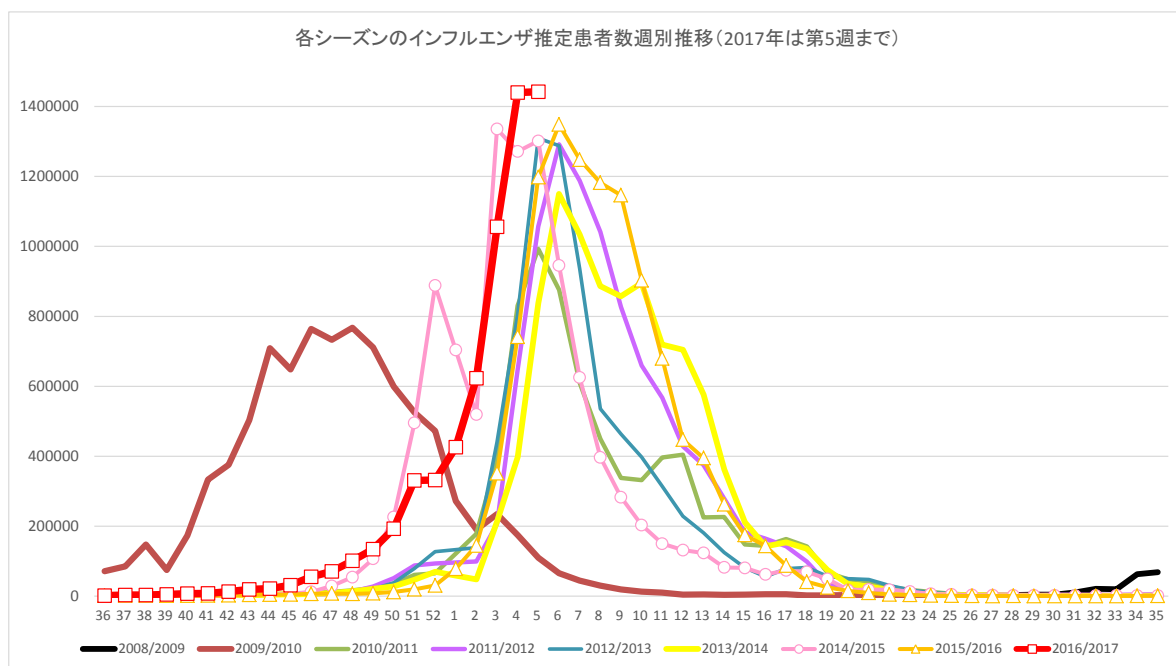


図1. 過去6シーズンと今シーズン（2016/2017シーズン）のインフルエンザ推定患者数の週別推移（第5週の推定受診患者数= 1,442,043）

2017年2月7日（2月6日分更新）

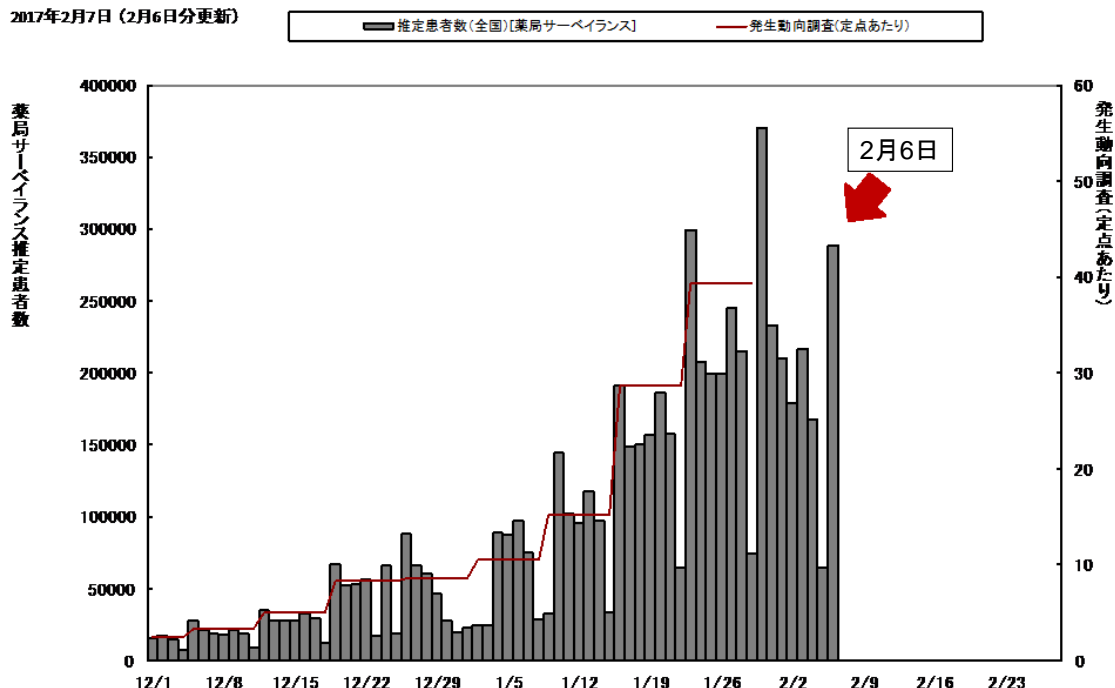


図2. インフルエンザ推定受診患者数の日別推移（2016年12月1日～2017年2月6日；2017年2月6日の推定受診患者数=288,571）

2016年第36週から2017年第5週までの累積の推定患者数は6,316,207であり、日本の人口推計値（2016年11月1日現在、1億2695万人）で換算すると、累積の罹患率は約4.98%となりました。罹患率を年齢群別で比較すると5～9歳（16.17%、858,440人）、10～14歳（15.45%、849,594人）、0～4歳（10.03%、515,687人）、15～19歳（10.02%、599,180人）、20～29歳（4.92%、625,453人）、30～39歳（4.65%、707,736人）、40～49歳（4.19%、794,000人）、50～59歳（3.62%、556,067人）、60～69歳（2.24%、410,036人）、70歳以上（1.64%、400,014人）の順となっています（図3）。第5週の推定受診者数は、多くの年齢群で前週（第4週）よりも増加していますが、罹患率が高く流行の中心である5～9歳、10～14歳の年齢群に加えて15～19歳の年齢群では減少が見られました。

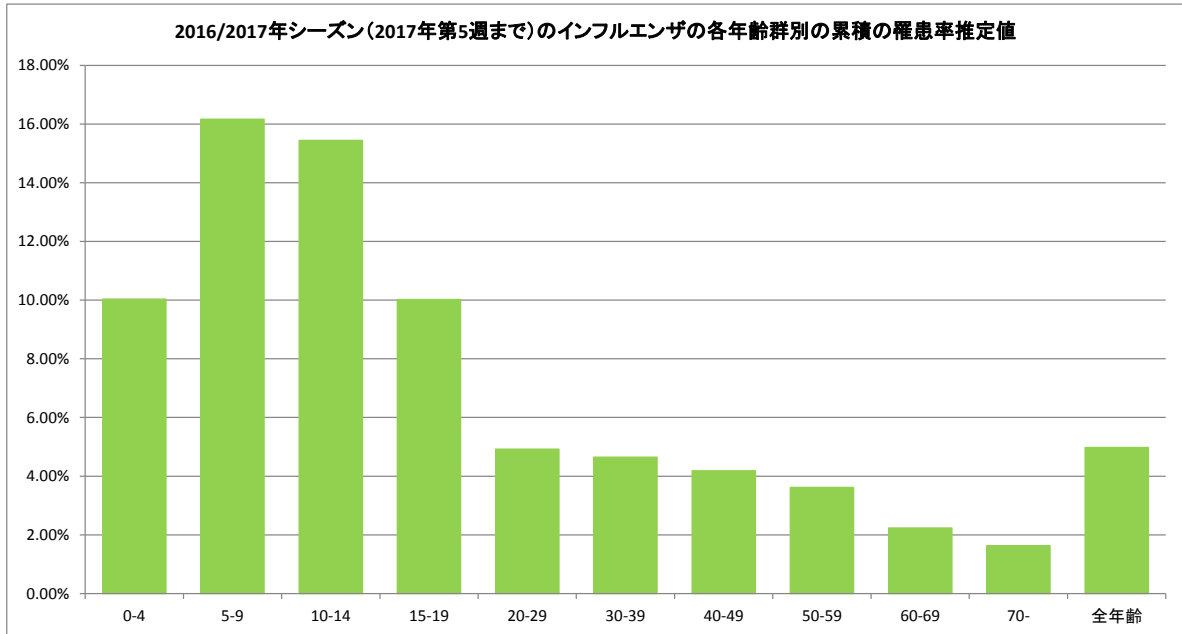


図3. 年齢群別のインフルエンザ罹患率推定値 (2016年第36~2017年第5週、累積の推定受診患者数総計= 6,316,207)

各都道府県別の2017年第5週の人口1万人当たりの1週間の推定受診者数をみると、福井県、奈良県、大分県、徳島県、高知県、広島県、宮崎県、三重県、岐阜県、岡山県、鹿児島県の順となっています。27府県で前週(第4週)よりも増加が見られました。

国立感染症研究所感染症疫学センターの病原微生物情報(<https://nesid3g.mhlw.go.jp/Byogentai/Pdf/data2j.pdf>)によると、今シーズンこれまでのインフルエンザ患者由来検体から検出されたインフルエンザウイルス(2,200検体解析)は、A/H3(A香港)亜型が91.0%と大半を占めており、次いでA/H1pdm 5.2%、B型3.8%の順となっています。

2017年第5週のインフルエンザの推定受診者数は前週を大幅に上回って約144万2000人と前週の値をわずかながら上回って薬局サーベイランス開始以来の最高値を更新しましたが、第6週の患者数は減少することが予想され、流行のピークは過ぎ去りつつあるものと考えられます。今後は推定受診者数が100万人を超える本格的な流行期間がどれくらい継続するか、注意して見ていく必要があります。これからもインフルエンザの患者発生の推移には十分な注意が必要です。